

てからである。

ふたりの市長

●横浜の黄金時代

ことしはちょうど開港一二〇周年、市制施行九〇周年にあたっている。ながい市政のうちで、戦前の貿易商業都市としての横浜の黄金時代は、明治四〇年以降のほぼ一〇年間といえるだろうが、そうした最盛期への足がかりをつくったのは、四代市長市原盛宏である。市原市長は新島襄門下の同志社出身（エール大学卒業）で、そのころ第一銀行の横浜支店長だったが、かねがね横浜港の発展と横浜の工業都市としての成長を持論とする積極論者だったのをみこまれたのである。

市原市長のかつぎだしに反対した一派は、市長は市の吏員を登用すればよい、他の大人物は無用であると主張したが、結局投票により積極派が勝を占めた。市原市長は明治三六年一月から三九年五月まで約三年半その職にあったが、その後の横浜発展の方向づけがこの間になされた。

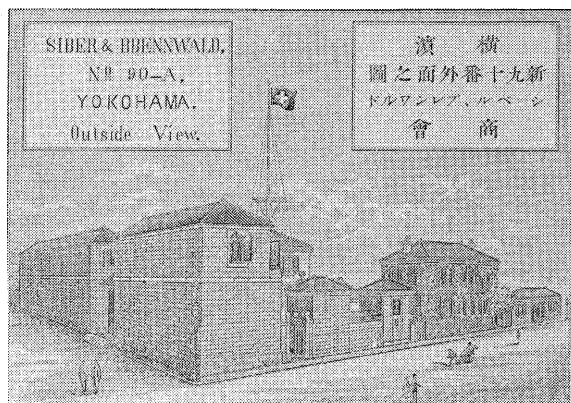
市原市長は、就任半年後の七月七日、横浜会館で今後の市政について自己の見解をのべ、市民の協力を要望した。市原が市会だけでなく、市民にも訴えたのは、「横浜市長空前の快拳」であると、当時の新聞は報道している。

演説の要旨は、「今日までの横浜の発達は受動的な発達であったが、その時期は終わった。これからは自動的即働きかけの発達が必要であり、それには産業基盤整備、生活基盤整備が必要であり、そのために、これを検討する都市政策に関する委員会を設ける必要がある」。産業基盤整備には、港湾の設備完成、交通機関の設備完成、商取引関係の改善、市内工業の興起発達の四点が重点とされた。

一方、生活基盤整備には、衛生設備の改善、教育事業の発達、慈善事業の奨励整理、図書館の設立、美術館・公園など市民生活を豊かにする施設の設置を、グラスゴー、バーミンガムその他欧米近代都市の例をあげて強調した。

これを、ひとことではいえず、市原市長の描いた横浜の将来像は、産業港湾都市である一方、近代的な都市政策によって整備された住みよい都市であった。その上、市政研究委員会の設置構想にみられるように、にない手としては、近代的な市民社会における市民が想定されていた。

外国商館（新90番外観）



産業基盤整備のうち、港湾施設については、横浜市が費の三分の一を負担して、明治三九年から第二期拡張工事が開始され、岸壁、倉庫、棧橋の改築など、この工事によって新港埠頭、大棧橋の完成をみた。工業の興起については、明治四四年、帷子川などの改修、工場地帯設置計画として実をむすんだ。また委員会については、まず三六年に調

査と研究に対象をしばった横浜市改良期成委員会を設け、ついで三八年には市原を会長とした港湾改良期成委員会が、さらに四二年には横浜経済協力が発足した。なお市原は市長辞職後、第一銀行にもどったが、四四年

朝鮮銀行総裁となり、大正四年に没した。

このように横浜市の産業基盤整備は、明治四十年代以降みるべき成果をあげ、途中保土ヶ谷町などの市域編入による二万五千人の転入もあったが、市の人口は明治三六年の三二万人が一〇年後の大正四年には四二万と着実に増加した。

しかし、二本柱のいまひとつの柱である生活基盤整備の方は遅々としてすまなかつた。大正元年（一九一）に、当時のオピニオン紙だった『時事新報』は、「眠れる横浜市政」と題して、つぎのように論評した。

衛生施設のうち、「未だ下水道の施設安からず」、上水道についても「設備不完全にして、夏期に至れば必ず長時間の断水」をみるありさまである。道路も「一度雨降らば、道路の大部分は忽ち泥濘と化し、又晴天に黄塵万丈の巷」となる。ひるがえって風致上の施設をみれば「一つの公会堂なく、一つの図書館なく、又一つの教化的娯楽機関も」なき惨状であり、救済機関についても「多少治績の見るべきものなきにあらざるも」これまた申し訳のものにすぎないと酷評されている。わずかにみるべきものとしては、瓦斯事業があげられているにすぎない。

富国強兵が第一義であった当時のわが国では、生活基盤の立ちおくれは、なにも横浜だけの現象でなく、首都東京においてさえ、下水が不備なため、到るところに「汚水停滯し、其不潔と臭気とは満都市民の今尚不快とする程の有様」であった。要するに市民社会にまだ到達していない段階で、都市は田舎の延長にすぎなかつたのであろう。

それに、当時の横浜市政は消極財政だった。横浜の戸あたり税額は、神戸・大阪・東京とくらべて最高だったにもかかわらずである。市政のリーダーシップは貿易商が握っていたが、制限選挙制下にあつて、有権者の大部分は地主・家主層が占めていた。この地主・家主層にとっては、商工立市へむけての市政振興よりも、消極的な緊縮財政の方が税金の関係で望ましかつたのであろうか。大正元年と七年を比較すると、第一次世界大戦景気により、市内の工場生産額は八・八倍、貿易額は二・八倍にのびたのたいし、市政は一・二倍にとどまっている。

そして、大正九年の戦後恐慌は横浜財界に大打撃をあたえ、つづいて三年後の関東大震災によって横浜港は潰滅した。復旧工事は震災後五〇日たつてから着手されたが、この震災を期に、横浜港と神戸港の地位は逆転し、昭和二十

年代の終りまで神戸が日本第一の貿易港の地位をしめるにいたつた。

●震災のあとに

震災後の大正一四年五月、有吉忠一が一〇代市長に就任した。有吉市長の任務は、横浜の震災復旧であつたが、米貨公債を募集することで資金を調達し、四年かかつて大規模な復興事業をなしとげた。市電の路線大拡張による交通網の整備と鉄筋コンクリートによる小学校建築のふたつが重点事業だったが、おかげで昭和二〇年の大空襲のさいには、この小学校だけが焼けのこり、多くの人命を救つた。

有吉市長の代には、このほかに、昭和二年、横浜市域の大拡張および区制施行、同三年、低利の政府資金による子安・生麦地先海面二一haの埋立による工業都市化への転換、滝頭塵芥焼却処理場の建設などの懸案事業が、つぎつぎとたたづいていく。こうして、戦前の都市施設の骨格はほぼこの時代にできあがつた。

太平洋戦争中、外国貿易はとだえたが、すでに重化学工業都市としてのみちを歩んでいた横浜市は、昭和二年の人口五二万が一七年に一〇二万とほぼ二倍になつた（戦前は

六大都市のうち人口は一番下)。それが二〇年の戦災により人口は六二万にまで急減した。これは昭和五年の水準である。二〇年五月の空襲は、市内の中心部を焼野原にし、港湾施設にも大被害をあたえたが、敗戦後、一転横浜は基地の町となった。

昭和30年代初めの関内



神戸がアジアやヨーロッパ向けの港であるのになにし、横浜はアメリカ一辺倒の港だった。百年近い交流があったわけだから、五年やそこらの戦争で、横浜人に鬼畜米英というスローガンがすんなり耳に入るはずがない。その意味で、アメリカ軍の占領にいちばん抵

抗のないまち、それがヨコハマだったといえる。五月二九日まで東京に三度の空襲があつても、横浜は無事だったから、横浜人のあいだにひよっとすると助かるかもしれないという気持がなかったとはいえない。

しかし焼かれた恨みよりも、横浜で商業の中心地や問屋の密集地が焼野原となつた方が重大であつた。おまけに港湾施設は接収されたし、流通機構が潰滅したため、横浜の戦後経済は無からやりなおさざるをえなかつた。戦後の十年間他都市におくれをとつたゆえんである。

戦後の横浜は実に市街地の六割が接収され、山下公園が米軍の兵舎となり、伊勢佐木町に鉄条網で仕切られた野戦病院と小型飛行場（ヘリコプター用だが）のあつた時代である。昭和二十年代は、われわれ庶民にとっては最低の生活をしいられた貧乏時代だったが、米軍を利用して身をたてようとした一群の人びとには、わが横浜は一獲千金のチャンス渦巻いているまちだった。野沢屋百貨店がPXになり、不二屋がGI食堂で、日本人オフ・リミットと銘うたれ、伊勢佐木町におっかなびっくり足をふみいれて、ここはこの国かと思うような数年間が横浜にあつたことは、いまでも鮮明な思い出となっている。

なお、五〇年に前回の白書で、市内に県下接収地の半数の一四か所があるとふれたが、その後五二年に横浜ペーカリー、五三年に横浜チャペルセンターの二か所が解除された。終戦以来の接収面積一、六〇八haのうち、五三年六月現在で解除面積一、〇〇四ha、未解除面積六〇四haで、そのうち上瀬谷通信施設が二三七haを占めている。

高度成長とともに

●スプロールはじまる

昭和二十年代には、東京区部内への転入は、きつく制限されていた。米の配給のめどがたなかつたからだが、このためあらたに東京に職を得た人々は、住居を二三区のおとに求めざるをえなかつた。こうしてまずスプロールはお米が原因ではじまったのである。

東横線の沿線を例にとると、二十年代の後半には、多摩川を渡った川崎市の武蔵小杉や元住吉など東京に近いところから農地が宅地にかわった。もともと軍需工場の多かった関係で、個人住宅よりも社宅が多くつくられている。そ

こがうまると、だんだんと南下し、横浜市域へひろがってきた。

低地では綱島と大倉山のあいだが、四、五年のうちにきれめなくつながった。それから日吉・師岡・菊名・篠原の丘陵地が切りくずされて住宅地になった。この年代の住宅地の条件は、駅へ歩いて通える範囲ということだった。駅でバスと連絡しているのは綱島だけで、鶴見や大圃とむすんでいたが、本数もすくなかつた。また二十年代の後半、東急は将来田園都市線の沿線になる山林を自分で買うか、地主に整理組合をつくらせるプロジェクトをすすめていた。まだまだ私鉄の駅のすぐ近くに（相鉄三ツ境など）家賃のやすい公営住宅がどんどんつくれた時代だった。

日本住宅公団の発足は昭和三〇年七月だが、翌年五月に千葉の稲毛団地ができあがり、入居がはじまった。ピカピカのステンレス流しやガス台、水洗式のトイレ、ガス風呂などは、当時の新生活のシンボルだった。

民間では、これよりさき三〇年の一二月に第一生命住宅が武蔵小杉の駅前にできている。第一期工事は一二戸ずつの九棟で、うち八棟は会社用に社宅として分譲され、一棟だけが一般用だった。2DKの五〇㎡で一戸平均一八〇万